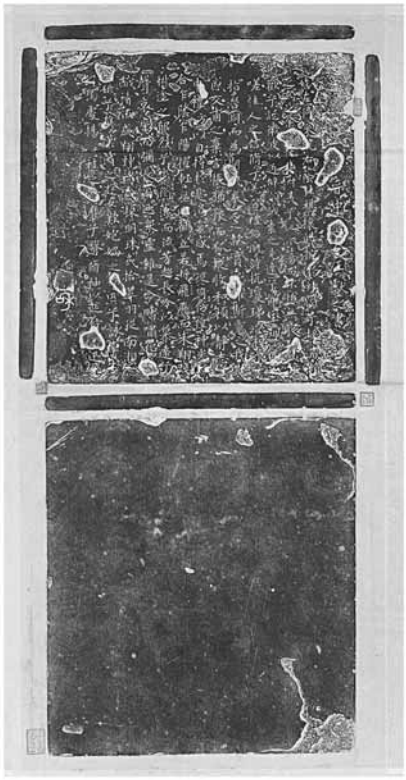
主図版　「玉版十三行旧拓本」（原寸大）

「落ち穂拾い記」⑥⓪

伝・賈似道刻「洛神賦十三行」下



図①　玉版十三行原刻・六面拓

図③　上海博物館本

図④

原石写真　旧拓本　上海博物館本

図②　「不」字の新旧比較

新拓　梢旧拓　旧拓　初拓

これまでに、数多くの「洛神賦十三行」拓本を見たり、手にしてきた。賈似道刻と伝えられる原刻拓本や精巧な翻刻拓本も、更に各種の印刷資料などである。その中でも珍しい拓は、20数年前に北京に1年滞在した折りに、以前手にした伝・賈似道刻の十三行原石の全面拓本が欲しくなり、特別に制作してもらった六面拓本である。この刻石の全面を見る事が出来る非常に珍しい拓である（図①）。また清朝後期の稍旧拓は手にしたが、旧拓の善本は、非常に少ない。上田桑鳩先生旧蔵の名品『晋唐小楷帖十三種』の中には、淡拓初拓整本が収録されいる。初拓本は、3行目の「不」字がほとんどキズがなく、図②に示したように次第に第一画と二画が破損してゆく。東京国立博物館の高島塊安居旧蔵本に2件、書道博物館にも1件旧拓善本が所蔵されている。2002年に刊行されたカラー精印の『中国法帖全集』（全18冊）に収録されている上海博物館所蔵の『玉版十三行』は、名家旧蔵の名品として原寸大で収録されているが、丁寧に確認すると明らかに原石と異なり、翻刻拓本である（図③）。文字は丁寧に真似て刻されているが、長い間に原石の面に不用意に付せられたキズ（石花）も真似て刻されているが、明らかに異なる（図④）。この刻石の翻刻拓本は、多くの種類があり、印刷資料にも翻刻拓本が使用されているのを多々見る事がある。数年前に都心の大型の古書即売会で、可愛い手のひらサイズの袖珍本の『玉版十三行』を手にした。一頁に三行六字に装丁された小型の折帖本であった。3行目の「不」の状況から旧拓本と認識した。清朝・乾隆時代の名家・畢瀧や陳介祺の鑑蔵印のある善本であり、主図版右頁には、ほぼ原寸で、巻頭と巻末の四頁を示した。　伊藤滋（書斎名・木鶏室）

書のひろば

理事長　下谷洋子

第76回全国学生書道展搬入・審査終了

第76回全国学生書道展は、10月23日に作品搬入を終え、審査は10月30日～11月4日にかけて行われました。

今年は参加団体数はほとんど変わりませんでしたが、半紙が減少し、半切½がかなり増加しました。

A賞は30日の事前審査を経て、31日に選考委員6名により決定しました。半紙部門から100名、半切½部門から50名、B賞以下特別賞に両部門合わせて2934点が入賞しました。

第76回全国学生書道展出品統計

（　）内は前回展

	団体数	出品点数	出品人数
半紙の部	147	9,696	4,977
	(145)	(10,430)	(5,326)
半切½の部	101	2,615	1,396
	(102)	(2,492)	(1,851)

両部門とも入賞された作品はいずれも見事な書きぶりで、特に、大賞受賞者の迫力のある作品には審査員の先生方も賛嘆していました。

来年2月に東京都美術館に展示されます。

2月10日の表彰式は、今年は上野精養軒に移ります。例年通り当日午前中は展示会場にて大賞受賞者による席上揮毫会を行います。翌9日午後1時からは、やはり展示会場でワークショップも実施する予定です。

今年も表彰式の会場が移ることになりご迷惑をおかけしますが、ご協力をお願いします。

全日本書道連盟講演会

講師・九州国立博物館館長　富田淳氏

映像を駆使しての講演

11月7日、日展開催中の国立新美術館講堂にて講演会が開催されました。

演題は「王羲之の眼差し、王羲之への憧憬」・王羲之の眼差しについて特別展『書聖王羲之』舞台裏、特別展『顔真卿』舞台裏。また・王羲之への憧憬では翁方綱と李宗瀚についてなど、多彩な内容を主にスライド映写で具体的にお話をいただきました。会場いっぱいの聴衆で大盛況でした。

毎日書道会　理事総務会開催

11月15日(金)、如水会館にて理事総務会が開催されました。

主な議題

1　第75回毎日書道展の入場者等
2　第76回毎日書道展の基本方針
3　第76回毎日書道展
　・日程
　・主要役員
　　実行委員長　下谷洋子
　　審査部長　山中翠谷
　　総務部長　千葉蒼玄
　　陳列部長　増子哲舟
　　運営委員(本院関係)
　　漢字部　名越蒼竹
　　近代詩文書部　大平邑峰
　　大字書部　小林琴水
　　前衛書部　大石仙岳
4　2024チャリティ募金の件
5　2025現代の書　新春展開催の件
6　2025毎日書道展新会員作家展の件
7　第33回国際高校生選抜書展の審査結果報告
8　第56回現代女流書100人展の件
9　第40回毎日現代書関西代表作家展の件　他

第76回毎日書道展は、私が実行委員長、千葉蒼玄先生が総務部長を務めることになりました。ご協力をお願いします。

公益財団法人書道芸術院通常理事会開催

今年度第3回通常理事会が11月23日上野精養軒にて開催されました。

第78回書道芸術院展・第76回学生書道展について(研究会・表彰式・席上揮毫・祝賀会・ワークショップなど)、人事について(昇格、移籍、退会など)、令和7年度単位認定講習会についてを審議しました。

第78回書道芸術院展の「評論家の眼」は、高橋利郎・室井玄聳先生となりました。他には、企画委員会の報告や、書道芸術院創立80周年記念事業の進捗状況なども報告しました。

（詳細は次号院報）

令和6年度書道芸術院創立記念日講演会　伊藤滋講師

11月23日午前中の理事会終了後、同会場にて慣例の講演会が開催されました。今回は、20年ほど書道芸術誌に古典の名品を紹介していただいています伊藤滋先生をお招きして、『集王聖教序碑』を中心とした講演をいただきました。詳細は次号に報告いたします。

漢字書基礎基本講座 (7)

種谷萬城

拓本

臨書

点画の解説

倣書

楷書5　雁塔聖教序

初唐の三大家の一人褚遂良(569～641)は、杭州錢塘(浙江省)の人。虞世南・欧陽詢に遅れること約40年。唐太宗の書の顧問として王羲之の書の蒐集に尽力し、後の高宗の教育に当たるなど重用された。太宗の崩御にあたり、後事を託され、高宗にも仕える。しかし、高宗が皇后王氏を廃し武昭儀(後の則天武后)を皇后に立てると、これに諫言し、二人の怒りをかい左遷。愛州(ベトナム)に流され没した。

雁塔聖教序は、褚遂良58歳の書。極めて細い線の中に、多彩な筆法を駆使し、細太、強弱、緩急の自在な変化を極めた傑作。

臨書にあたっては

- 線の表情を感じ取る、豊かな感受性と鋭い鑑賞力を要する。
- 筆先の微妙な変化を表現できる筆を用いる。
- 墨はやや淡墨。墨量は少なめ。
- 軽妙で変化のある運筆・用筆をする。速度、筆圧の変化。筆鋒の開閉、直筆・側筆、蔵鋒・露鋒を使い分ける。
- 字形はやや下広がり。向勢・背勢変化。
- 中心部分を小さく、手足を長く。余白美。

ユーチューブ『筆のサロン』に臨書と倣書の関連動画を配信しました。是非参考にして、雁塔聖教序を学んで下さい。QRコードでアクセスできます。

筆のサロン
QRコード

基礎基本講座

篆刻・刻字基礎基本講座 (7)

後藤大峰

「印稿」が出来上がりましたら、愈々(いよいよ)、実際に印材に刀を入れ、作品を創って、いきましょう。

先ず、印材に、出来上がった印稿を「逆字」に文字を入れていきます。

この作業は色々な方法があります。

最も一般的な方法は筆で書き入れるやり方です。先にお話し致しましたように「逆字」に入れなければなりませんので印稿を「鏡」に写し、それを印材に鏡に写った逆字を書き入れます。

次の方法として、一般的なのが「転写」です。

印稿を準備し、その上に「雁皮紙」等の転写用紙をのせて、印稿を筆と墨で写し取ります。

それを、裏表にし〝逆字にして〟印材にのせ若干の水で濡らし、何枚かの〝反古紙〟を挟んで、印材の〝背〟等で、擦(こす)りつけます。

これが、転写方法の一つです。

その他、〝カーボン紙〟等で写し取る方法もあります。

これは、どの方法でも、それぞれ、各人のやりやすいもので行って下さい。

要は、印材に、綺麗にハッキリと、これから彫っていく文字原稿が写ればベストなのです。

次回は愈々、実際に〝印刀〟で印材に刀を入れていきます。

印材の種類等から、話を進めて行きたいと思います。

硬い、彫りにくい、柔らかい、彫りやすい等様々あります。ご自身に合ったものを見つけておいてください。

書道芸術院
令和の群像（2024）

第71回毎日書道展「李白詩」　　影山扇葉書

影山扇葉

「書の魅力」

私が初めて筆を持ったのは小学校1年生の時でした。種谷扇舟先生に教えていただき、「くつ」と半紙に書いたことを思いだします。半紙いっぱいに大きく書くことができなかったことを憶えています。何回目かのお稽古で「ふで」と書いたとき「ふ」の形がへんてこだったこと……今は楽しい思い出です。あれから半世紀がたちました。不勉強な弟子がこのように長期間継続できたのはひとえに先生の御指導のおかげです。そして諸先輩や友だち、さらに家族の励ましや協力のおかげと感謝しています。

大学受験の勉強をしていた高校生の時、先生から「書道を専攻するのでなければ休んだほうが良いんじゃない」と言っていただき休んでいました。大学生になって再開した書道は臨書が楽しくて墨の香りが好きになっていました。大学4年の時、武道館の書初め展覧会で総理大臣賞をいただき、「これからは精進します」と誓ったのですが、働き始めて比重が一気に仕事に傾き、精進できずに今に至っています。

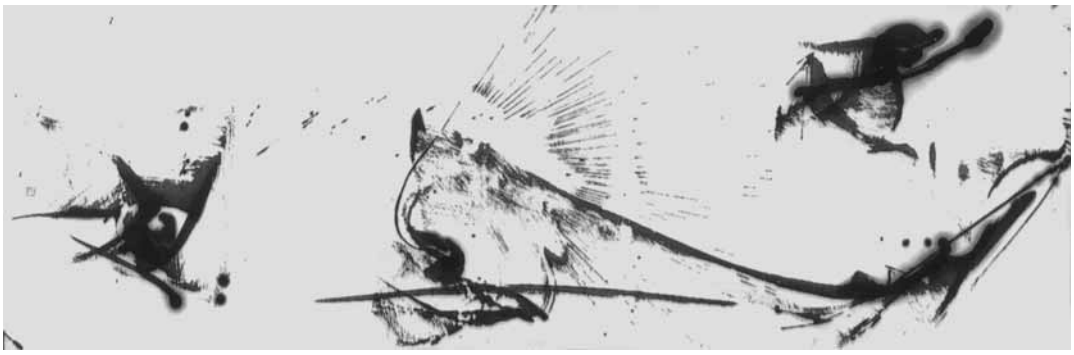
仕事が忙しいことを言い訳にしていた時に展覧会で賞をいただいたことがありました。その授賞式で来賓の先生が、「皆さんは書という世界を持っています。ほかの仕事が上手くいかなかった時には『私は書のプロ』と思えばよいし、書で壁にぶつかった時は『私は仕事のプロ！』と思えば良いのです。」とおっしゃられたのです。私はこのお話でとても気持ちが明るくなりました。仕事がうまくいかない時は『私は書のプロ…』とストレスを解消しています。これからもこの気持ちで書と仕事を頑張っていきます。

展覧会への作品が書けずにぐすぐずしている時、扇舟先生に「展覧会は上手くなってから出品するのではなくて、良い作品を作るように頑張りなさい」と教えられたことがありました。今ももっと勉強すればよかった……と後悔しながら出品しています。これからは萬城先生を始め諸先輩の皆様の御指導の下、精進していきたいと改めて思います。

書道展に行って諸先生方の作品の前に立つと、『帰ったら書こう！』と心が叫びます。書の魅力を体感することは素敵な時間です。

余談ですが、私が初めて飛行機に乗ったのは中国山東省への研修の旅でした。摩崖碑、孔子廟、泰山の視察など、あの時の感動は忘れられない特別の経験です。扇舟先生、飯高和子先生方の厳しい御指導を受けての2週間はとても贅沢な時間でした。暑かったあの夏の体力はないけれど、気持ちは20代のあの頃に戻って頑張りたいと思います。

書道芸術院
令和の群像（2024）



第70回毎日展出品作「珠」　　相内珠莉書

相内珠莉

「書の道、雑感」

工藤永翠先生と出会い、ご縁がご縁を生んでたくさんの先生方にご指導を頂いてきました。毎月の課題を練習し、段級が上がっていくことに喜びを感じていたある日、師の前衛の書作風景や作品を拝見しました。大変な衝撃を受けた私は、すっかり心を奪われてしまったのです。ほどなくして、講習会や展覧会にも参加するようになりました。揮毫を拝見し、皆さんの熱気に負けまいと夢中で書くうちに、私の書の道が少しずつできていきました。「講習会は普段の稽古の何日分にもなる」と言われましたが、参加するたびにそのことを実感しました。前衛書はもちろん、他の部門も含め総合的に勉強できる貴重な機会ですし、必ず新しい学びや発見がありました。

臨書の大切さも師から教わりました。まず自分の眼で観て書いてみる。それから、資料の情報や師からのご指導も頭に入れて再度観る。また筆を走らせる。注視と運筆を繰り返すことで学んだことを自身の血肉とし、作品制作に生かしたいと考えてきました。

創作への基盤としている古典は様々ですが、かなの要素も取り入れています。古筆を学ぶうちに、前衛書を書く上で重要なことが、かな美の要素に重なることに気づいたのです。それからは、どの部門でも自分なりの視点をもって鑑賞するように心掛けています。行の傾きの中にある広狭、粗密、揺れ。連綿に現れる筆脈。余白美。それらは、全部門に共通して表出する書美の構成要素だと思います。

線質は作品の命であることも学びました。紙面に喰い込む線や側筆にリズムと速度を付加した渇筆の線等、変化のある用筆によって奥行きのある線での表現を目指しています。多様な線は律動を生み、筆意が現れるはずですが、自然体で書くことが課題です。

さらに、墨の研究も必須です。墨作りには毎回苦労しますが、青墨の淡墨による明るい作品、白と黒が響き合った美しい作品を目指す私にとって、墨色も大問題です。

師との出会いが、私の人生に様々な景色を加えてくださっています。書の学びは果てしなく、力量不足で苦しいこともありますが、感動も楽しさも頂いています。たくさんの出会いと導き、愛に感謝し、今後も書の道を歩んでいきたいと思います。

書道芸術院
令和の群像（2024）

第67回毎日書道展毎日賞「優遊自寧」　　高橋芳琴書

高橋芳琴

「遊びをせんとや生まれけむ」
（世阿弥）

『遊び』とは、文学・芸術の理念として、人生から遊離した美の世界を求めること。（広辞苑第二版より抜萃）

書の世界に何も解らぬまま入り込んだのが、昭和30年、古川小学校（現・古川第一小学校）1年の時。大澤雅休先生の直弟子高橋樹石先生の教室でした。昭和28年雅休先生がお亡くなりになるまで、樹石先生を筆頭に、諸先輩が夜行列車で東京下高井戸の雅休先生の自宅に通っていた頃でした。（いよ夫人が、暖かいおみそ汁つきの朝食を用意してもてなしていただいたことがとても嬉しかったそうです。）東北から新しい光を。書道芸術院、草創期の先生方に幼少期から薫陶を受けたことは、何物にも変えがたい宝物です。特に樹石先生の前衛の御指導は、雅休先生の形見の黒い半ズボンを身に着け、まるで、雅休先生が憑依したかのごとくスケールの大きいものでした。

古川中学校では、書道部に属し、書道部部長を務めました。宮城県古川女子高等学校（現・古川黎明高等学校）入学。書道ではなく美術を3年間専攻し基礎から学びました（後の前衛を書作する上での力に成りえたものと自負しております）。卒業後、書の勉強のため、学費を捻出しなければならず、電電公社（現・NTT）に入社。同時に加藤翠柳先生の宮城野書人会に入会。19歳で師範の允許状をいただきました。（翠柳先生がお亡くなりになるまで、肉筆通信指導を受けておりました。）ここからが書の道のスタートです。書人会が主催する講習会には、職場の年休を取り、かかさず出席しました。創草期の先生方の心のこもった御指導は、今でも忘れることがありません。また、書道芸術院展、河北書道展、等にも出品しておりました（この時代は、少字数書・墨象）。24歳で結婚、相澤から高橋に改名。育児と書を両立させることは、並大抵の苦労ではありませんでしたが、何とか切り抜けることが出来ました。36歳で書道芸術院審査会員に推挙（前衛書部）。大内魯邦先生、高橋樹石先生の御指導に感謝。

〝篆刻・刻字との出会い〟。30歳の時、香川峰雲先生の刻字講習を受講し道具がすべて揃っていた。年に一度、樹石先生の教室で千田得所先生の篆刻講習会があった。その時に副講師として来ていたのが後藤大峰先生でした。得所先生亡き後、「石心会」を継がれ、仙台エスペルカルチャー教室で篆刻・刻字教室の指導をしていると知り迷わずに受講しました。（この20年ほど前より、御家流香道を、仙台から古川に先生をお迎えして楽しんでおりました。ところが、先生御高齢のために解教となったこともあり条件がそろいました。香道では、執筆を担当し、百住香では、全香、正解でした。日本唯一の道である香道、雅の世界を十分に楽しみました。また、念願の正倉院展、東京国立博物館での〝黄熟香「蘭奢待」〟の移動展は圧巻でした。）

毎日書道展66回・67回展で毎日賞。後藤大峰先生の御指導の賜物です。感謝。

第170回芥川賞の九段理江さんが受賞決定時の会見で「人間には出会いや偶然を楽しめる余裕、遊びがある。それらによって生まれる創造性こそが人間とAIの違いです」と語った。人間にしか成しえない普遍的なものを大切にしながら、これからも「遊びをせんとや生まれけむ。」

令和6年度 第58回書道芸術院
単位認定講習会（東京）報告

会　場＝東京文具共和会館（台東区）
会　期＝令和6年10月20日（日）
主　管＝書道芸術院事務局
参加者＝67名

10月半ばだというのに、まだ時折夏日が残る中、本年度2回目の単位認定講習会を東日本地区在住の方を対象に開催しました。8月の山陽支局と内容を同じくし、1日開催（日帰り）で行いました。この講習会は本院の審査会員昇格に必須のもので、参加者の⅔が審査会員候補の方でありました。講座は、「かな、漢字、現代詩文書、書道芸術院の歴史」で、講義ならびに実技を交じえ基礎を学ぶ機会となりました。閉講式では、講評、単位認定証授与（代表　かな部　小暮真紀子様）のあとに、次年度開催地の南関東総局に引継ぎをして終了しました。

講義および実技①

かな　講師　下谷洋子先生
「かなの基礎と古筆の見方」
基本となる小筆の執筆方法と運筆、変体がなを活かした連綿の方法など揮毫を交じえ説明され、基本線や多様な連綿線を学びました。提出課題は高野切第三種の臨書となりました。

講義および実技②

漢字　講師　種谷萬城先生
「楷書の学習」
北魏から唐に至る6種の楷書の書風、特徴、臨書する気持ちや姿勢について揮毫を交じえ説明され、古典それぞれの持ち味を意識しながら臨書しました。提出課題は、自分の名前を楷書6種で書き分けることとなりました。

講義および実技③

現代詩文書　講師　小竹石雲先生
「―清新さを求めて―　古典に学ぶ表現の工夫（蘭亭序・米芾・虹県詩巻）」
現代詩文書で大切にしたいこと、古典の重要性、古典（蘭亭序）からの発展について揮毫を交じえ説明され、臨書とそれを応用したかな交じり書を練習しました。提出課題は、蘭亭序の臨書と自分の好きな詩を題材にした創作作品となりました。さらに先生執筆の「現代かな帖」が全員にプレゼントされました。

講義④

書道芸術院の歴史

講師　下谷洋子先生
戦後の創立から現在まで、8名の先生方の作品映像と院の歴史について紹介されました。また後藤常務理事から篆刻刻字、千葉常務理事からは前衛書（映像と音声）を解説されました。
今回の講習会は、事前に配付したテキストならびに動画視聴での予習を踏まえて実施されました。3名の先生の揮毫風景をスクリーンに映すとともに、受講生の目の前での実技指導は、今後書道に取り組むうえで、とても有意義な時間になったことと思います。書道経験の差はあっても、「目から鱗」があったことは間違いありません。基礎講座にふさわしいテキストをご用意くださった講師の先生、また院の役員の先生、熱心に受講された皆様に感謝申し上げます。

古典鑑賞 ㊹⑦⑤

争坐位文稿（顔真卿）③

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨（押印のみも可）

之始難。故曰。滿而不溢。所／以長守富也。高而不危。所以長／守貴也。可不儆懼乎。書曰。爾

（三井記念美術館蔵）

※掲載図版原寸、ただし行立てについては変更しています

〈解説〉本帖は草稿、すなわち下書きであるため、ところどころに訂正や削除、書き加えがある。1行目の4・5字目は訂正であるから字書で確かめたうえで「故曰」と書けば良い。また、別の箇所には小さな字で追加がされているが、半紙や半切に臨書する場合は適宜、拡大する必要がある。

争座位文稿について、今井凌雪氏は「王羲之の華やかな技法に対して、力の充実した線を学ぶには顔真卿がよい」と述べています。ポイントは、

・蔵鋒を主とし、筆のたわみ（弾力）を利用する
　→立体的なまるまるとした点画を形成
・墨をたっぷりとつけて盛りあげるように書く
・起筆はあまり大きくせず、筆先だけで小さく深くつきたてるようにし、途中でふくらみを持たせる

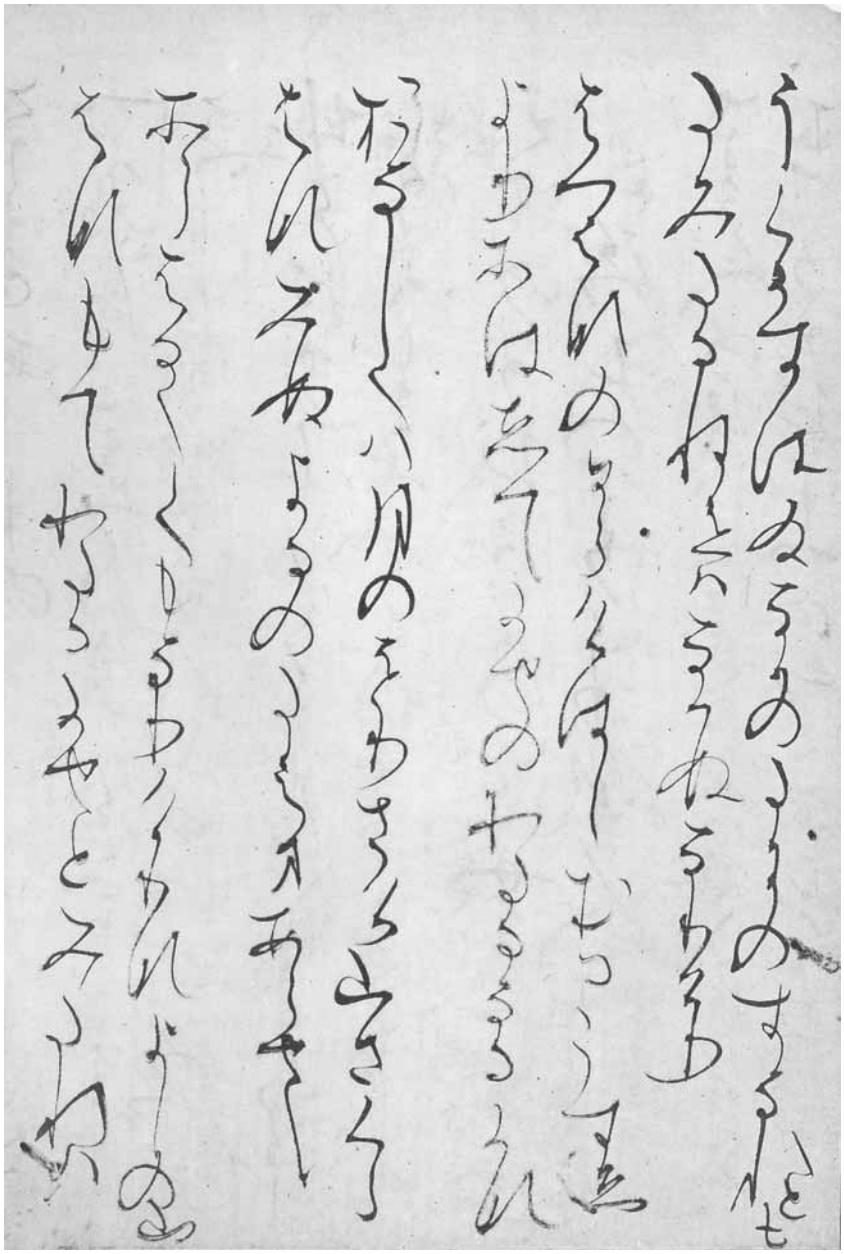
などである。

（編集部）

漢字研究部臨書課題	（半紙普通判・縦使用）上記掲載部分より何文字臨書してもよい。
特別研究部臨書課題	（A．大作の部―毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可 B．小品の部―半切⅓以上半切以内、全紙½以内も可（A・B縦横自由）） 当該古典の上記掲載部分以外も可。

古筆鑑賞

㉔⑨ 山家心中集（伝 西行筆）③



※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。なお、掲載図版は原寸です。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

〈よみ〉

うぐひすはゐなかのたにのすなれども
だみたるねをばなかぬなりけり
はつはなのひらけはじむるこずゑ
よりそばゑてかぜのわたるなるかな
おなじくは月のをりさけ山ざくら
はなみぬよるのたえまあらせじ
そらはるゝくもなりけりなよしの山
はなもてわたるかぜとみたれば

〈解説〉伝西行の古筆の中で、よく習われているのは、①一条摂政集 ②中務集 ③山家心中集 の3つである。

画数の多い変体がなの使用を減らし、単純で明快な筆致が特徴的である。自由に書き流しているように見えながらも、決して品位を失うことがない点は注目したい。

山家心中集の書風は②の中務集と近似し、紙面を切り裂くような線質が歯切れのよいリズムを生んでいる。また字形に大きな変化をつけることはない。同じ形が何度も繰り返されていることを確認したい。（編集部）

かな研究部臨書課題	（半紙普通判（**料紙可**）・**縦長**に使用）別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。上記の古筆の掲載部分より**歌一首以上を書く。（全臨も可）**
特別研究部臨書課題	A．大作の部＝毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可 B．小品の部＝半切⅓以上、半切以内（縦横自由）、全紙½以内も可 ＜いずれも上記の掲載以外も可。＞

漢字規定 初段以上【1月15日締めきり】用紙 半紙普通判

種谷萬城選書

花看半開　よみ（花は半開を看る）

書体＝自由

習い方解説 (3)

種谷萬城

花看半開　（菜根譚）
（花は半開を看る）

花は半開の五分咲きを見る。

続く語句は、「酒飲微醉　此中大有佳趣…」で、酒はほろ酔いに飲む。この中に何とも言えぬ良い趣がある。満開の花を見て、泥酔に至るまで飲むのは醜悪な姿態であると言っています。今月は、奔放で躍動感に溢れる傅山の行書を意識し、羊毫筆で書きました。左の参考作は草書です。創意に富んだ書作を楽しんで下さい。

〈参考〉

漢字規定 秀級以下【1月15日締めきり】用紙 半紙普通判

西川翠嵐選書

神融筆暢　よみ（神融け、筆暢ぶ。）

書体＝楷書

習い方解説 (3)

西川翠嵐

神融筆暢　（書譜）
（神融け、筆暢ぶ）

心がのびのびとして筆も暢達するの意。

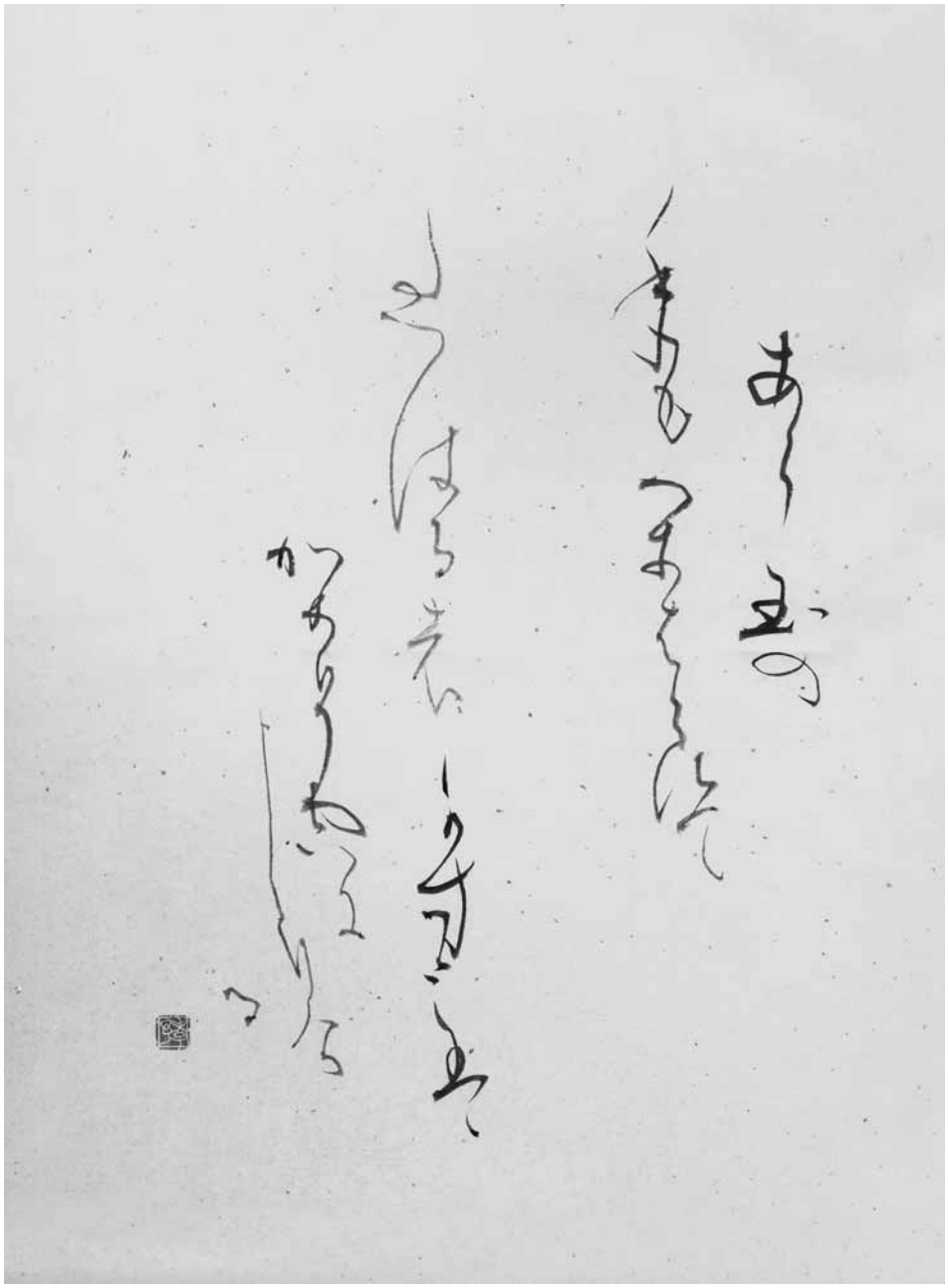
この言葉は有名な古典であり、書論としても名高い、孫過庭の「書譜」の一節です。

「人には『乖（調子の悪い時）』と『合（良い時）』がある。合の五つの条件が充分ならば精神はとき開かれ筆も伸びのびと動く。筆が動けばうまくゆかないものはない。」と言っています。五合とは、心やすらかにゆとりあり、知力活発。時候おだやかに潤い、紙墨がうまく合い、ふと書きたいと意欲のわく時。つまり、筆墨硯紙といった文房四宝にとどまらず書に向かう自己の心のありようを説いています。

自然や季節の移りかわりにも心を寄せ耳をすまし、新しいものを取り込もうとする心を忘れずに気持ちを落ちつけて紙に向かう。私たちもそうありたいものですね。

かな規定 初段以上【1月15日締めきり】用紙 半紙普通判（料紙可）

小島孝予選書



よみ方　あらたま(玉)の年も変(閑者)ら(良)で立(多)つ春(はる)は(者)
霞(可寸三)ば(盤)か(加)り(利)ぞ(曽)空に(尓)知(し)りけ(介)る

創作

＊料紙は半紙版(33.0×24.5㎝)を使用しましょう。半懐紙は上記のサイズに切って下さい。

習い方解説 (3)

小島孝予

あらたまの年も変らで立つ春は
霞ばかりぞ空に知りける
（後堀河天皇「新勅撰集」）

年明け前に立春になると（感覚的に春という気はしないけれど）霞の立った空を見て（春なんだなあと）気づかされたよ。

旧暦では立春が12月中に来ることは珍しいことではなく、12月中に起こる立春を「年内立春」という。

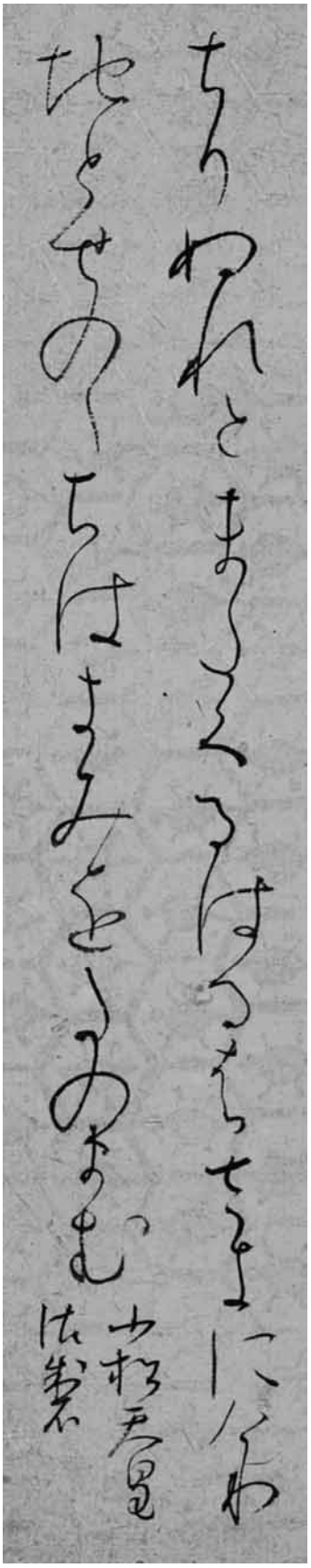
紙面の余白にポイントを置き、左上と右下に余白をとりました。また2行と4行の2つの固まりにして、後半4行では行間余白が同じにならないように留意し、変化をつけました。

文字の大小、線の太細によってリズム感を表わし、歌意の「年明け前の春を霞によって気づかされた」というような軽やかさと明るさが表現できるように書きました。

墨継ぎは「かすみ」です。

かな規定　秀級以下【1月15日締めきり】用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。部分臨書も可。〈注〉署名は「〇〇臨」。　粘葉本和漢朗詠集（掲載写真拡大120％）※2行目下の「小松天皇御製」は書かなくてよい。



よみ方　ちりぬれどまたくるはるはさきにけり（多久者 支 介利）
ちとせのゝちはきみをたのまむ（地 支 多）

歌意　花は散ったとしても、再び来る春にはまた咲くことになるのですよ。花が春を信じるように、私は千年の先までも君を頼みと致しましょう。

かな条幅規定【1月15日締めきり】用紙　小画仙紙半切（料紙可）

佐藤希雲選書

よみ方　お(於)ち(遅)葉して仏法流布の在所哉(か奈)

創作

※タテ形式に限る

習い方解説 (3)

佐藤希雲

おち葉(ば)して仏法流布(ぶっぽうるふ)の在所哉(ざいしょかな)

（小林一茶）

今回は漢字の多い俳句を選んでみました。連綿する場所も少ないので苦労するかもしれません。漢字と漢字の間は、空中でつながるように運筆する必要があります。放ち書きの呼吸をぜひつかんで下さい。

墨継ぎは「在」で行いました。

漢字条幅規定　初段以上【1月15日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

名越蒼竹選書

出門何所見　春色滿平蕪　可歎無知己　高陽一酒徒　（高適）

（門を出でて何の見る所ぞ　春色平蕪に満つ　歎ず可し知己無きを　高陽の一酒徒）

書体＝自由

漢字条幅規定　秀級以下【1月15日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

川島舟錦選書

一室惜烟燒濕薪　相逢無主亦無賓　（大智偈頌）

（一室烟を惜しんで湿薪を焼く　相逢うて主無く亦た賓無し）

書体＝自由

習い方解説 (3)

名越蒼竹

縦2行に書く場合、字数が増えると全体に文字が小さく、行間の響きが失われるおそれが発生します。これを避けるには全体的に字間を詰め気味にし、そこに生まれた余裕を利用して大きな（幅のある）字を混ぜるとよいでしょう。大家の作品では大きな文字の字座に入り込むように小字が書かれ、うまく字間を詰めています。

※タテ形式に限る

習い方解説 (3)

川島舟錦

部屋には生木を焼いた煙がたちこめていて、逢えばお互いに主人と客の区別もなくなる。気取らない質素なもてなしの中での、心を知り尽くした親友とのすがすがしい交流を詠ったもの。

書道を始めたころ、「楷書は基本。楷書が書けなければ、行書や草書につながらないので、しっかり練習するように。」といわれたものです。このごろ、楷書も行書も草書もそれぞれ難しいと感じます。

ペン字規定【1月15日締めきり】

東福青篁選書

牀前月光を看る
疑うらくは是れ地上の霜かと
頭を挙げて山月を望み
頭を低れて故郷を思う
李白「静夜思」　青篁書

◇用紙　ハガキ大（14.8×10㎝）の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用（ボールペン・フェルトペン可）

書体＝自由

ご注意!!
用紙の大きさにばらつきが見られます。
用紙サイズ（ハガキ大14.8×10㎝）を守って下さい。

習い方解説 (3)

東福青篁

李白は盛唐に活躍した有名な詩人です。生涯を漂泊の旅に生き、後世には「詩仙」と称せられました。日本への影響は大きく、李白に憧れていた松尾芭蕉は、俳諧紀行文『おくのほそ道』を残しました。

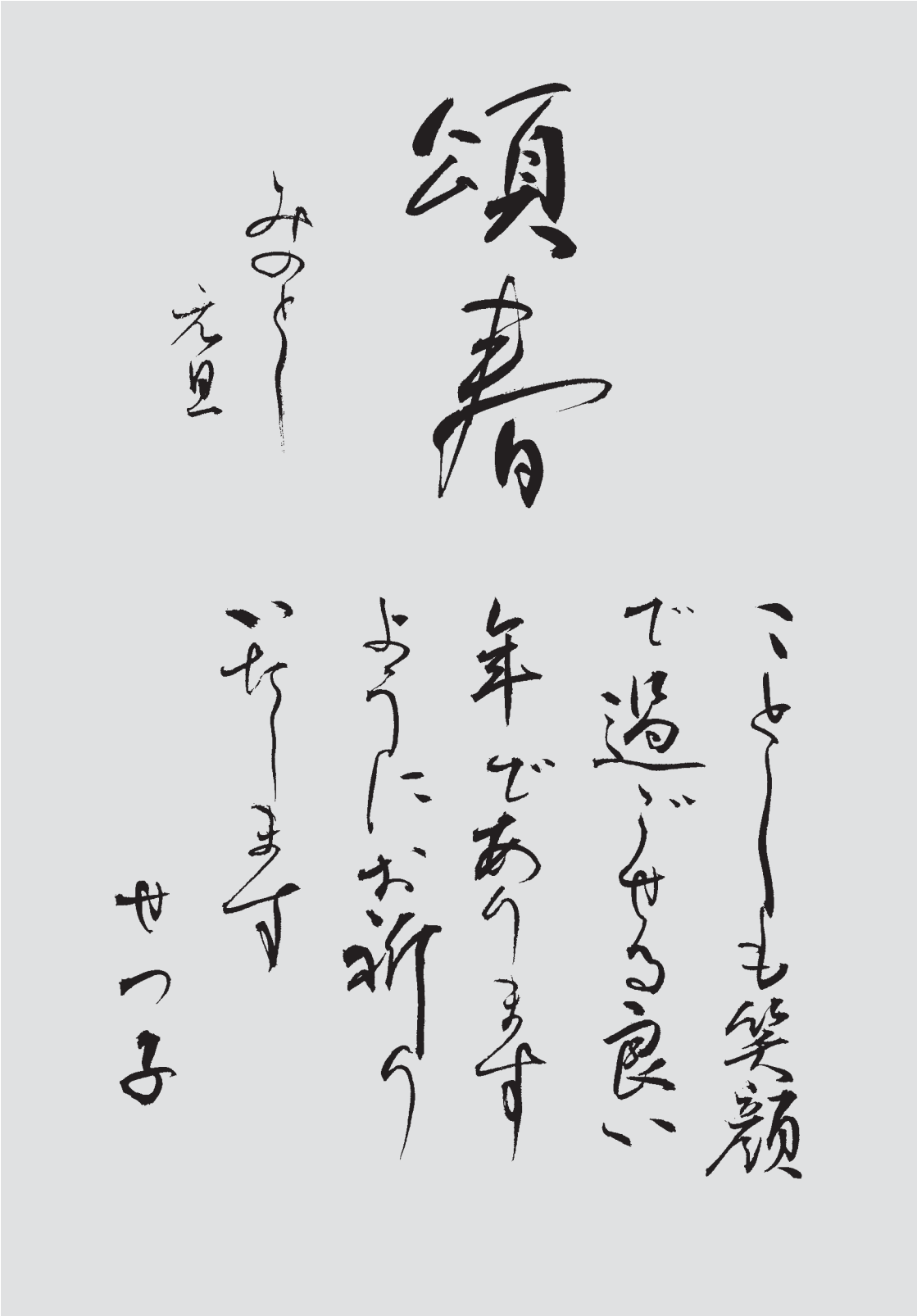
『静夜思』は五言絶句で、清らかな月の光と郷愁が染み入り故郷を思う、しみじみとした詩です。

書道芸術10月号の佐藤希雲先生「編集後記」に硬筆のことが書かれています。手書きの文字は人の心に強く伝わります。楽しくリズムに乗って、丁寧に練習を重ねて下さい。日常の暮らしの中でも、温もりのある手書き文字で想いや気持ちを伝えていきましょう。

牀前月光を看る
疑うらくは是れ地上の霜かと
頭を挙げて山月を望み
頭を低れて故郷を思う
李白詩「静夜思」　〇〇書

実用書　【1月15日締めきり】

頌春／みのとし／元旦
ことしも笑顔／で過ごせる良い／年であります／ようにお祈り／いたします／名前



書体＝自由

鈴木せっ子書

（掲載手本85％に縮小）

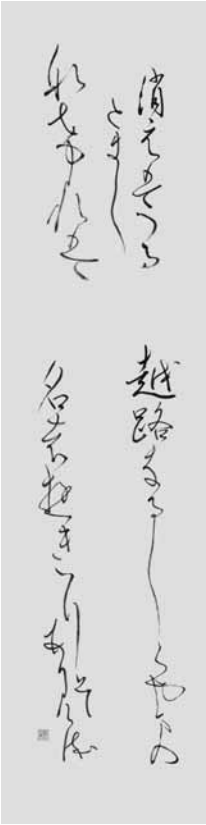
◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用　署名は各自の名前を（姓は不要、雅号使用も可）
◇用紙は普通版半紙横½（24.5×16.5㎝）　Ｂ５版コピー用紙（26.0×18.1㎝）も可
◇所定の出品券を作品の右下に貼る

今月のホープ作品・各部総評　NO.762

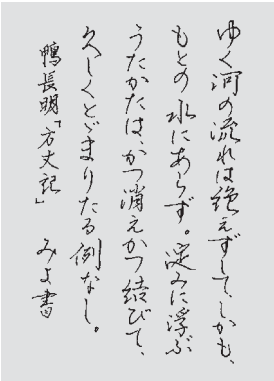
漢字部　師範　奥川　麗流
潤渇の変化を加えた線に、『金石之気』を感じる。青銅器銘文拓本の趣きを連想し、味わいが深い。
◎漢字部総評　上級は篆書、隷書の作品が多く見られた。篆書特有の書法に未熟な作も見られたが、創作意欲に溢れた作も多かった。（萬城評）

漢字条幅部　師範　江本　興舟
多彩な線での躍動感は筆線に輝きを生む。確かな技術と書への姿勢の真摯さに敬意を表したい。
◎漢字条幅部総評　行草作品が多かった。起承転結のしっかりしたものには自ずと生彩感も湧き筆を執るのが楽しくなる。（石雲評）

かな条幅部　準師範　宮崎　英明
上下2段の構成、行間の余白が作品を美しく見せ、「し」ののばし方に工夫が伺える。
◎かな条幅部総評　「雪」の誤字が多く見られ残念。和歌の内容を理解して制作する姿勢が肝要。上品な作品が多く好感。（峰子評）

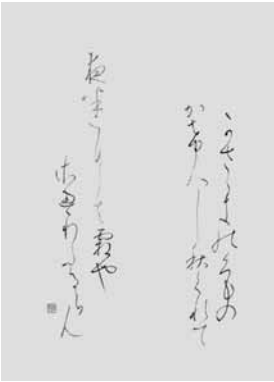


ペン字部　師範　浅川　みよ
漢字とかなのバランスが見事。豊かな弾力のある筆勢によって、暢びやかで格調高い作品となった。
◎ペン字部総評　行間余白が上手に取れた安定した作品が多かった。余白とともに漢字とかなのバランスを常に意識しましょう。（孝子評）



前衛書部　特選　練生川艸苑
厚みのある濃墨部と心地よい渇筆線の調和を計りその上で装飾性をも感じる作品に仕上げました。
◎前衛書部総評　さらにグレードアップした作品が多くとても頼もしく感じました。（慧香評）

かな部　師範　八木橋紀舟
滑らかな流れの美しい作品です。無理のない連綿の姿は、基本を踏まえての賜物と頼もしく感じました。
◎かな部総評　今回は鵲と霜の漢字で作品の調和を欠いたものが目につきました。かなに合うには硬い、墨量過多は要注意！（洋子評）



現代詩文書部　特選　玉渕　良章
潤渇の利いた伸びやかな線で黒と白の空間処理が見事。季節の爽やかな風情が感じられます。
◎現代詩文書部総評　心を柔軟にして作品に向き合い、自分のイメージを大切に書き上げる。（掃雪評）

実用書優秀作品

選評　佐藤莱扇

令和六年の二十四節気

九月七日　白露　二十二日　秋分
十月八日　寒露　二十三日　霜降
十一月七日　立冬　二十二日　小雪
十二月七日　大雪　二十一日　冬至

奥村美楓

特選　奥村美楓

とても伸びやかな雰囲気の作です。洋紙を上手に使っています。

令和六年の二十四節気

九月七日　白露　二十二日　秋分
十月八日　寒露　二十三日　霜降
十一月七日　立冬　二十二日　小雪
十二月七日　大雪　二十一日　冬至

多胡三千代

特選　多胡三千代

字形整い、丁寧な筆致で終始一貫した作。日々の鍛錬の賜物です。

◎実用書部総評

筆圧を変えることにより太くも細くも揮毫することができる筆は、万能の筆記用具だと思います。振りがなで苦労された方、散見。（莱扇評）

特選

大雲　奥村美楓
深大　多胡三千代
紅瑤　廣戸美岐
竹美　秋龍華
正華　加瀬明日夏

秀作（60音順）

亀松　池田直子
吉岡　石関惠美
澄春　加瀬夏峰
祥華　喜多志津子
こだ　北爪鼓祥
大雲　鷺山美梢
福山　徳永裕子
天璋　中里星子
琇韻　林美奈子
もく　本郷谷恵

佳作（60音順）

紅瑤　藍澤白珠
竹美　安藤美慧
蘭　大崎鉄舟
中川　大島竹鳳
菁湖　北嶋菁湖
紅瑤　高木百合子
江龍　田中二三代

入選（60音順）

誉田　中野惠美子
もく　東向西川藤象
澄春　畠山芝香
深大　深澤佳月
八街　本多真里子
〃　松山峰生
〃　村上佳月
やま　山口律子
もく　青木藤蓮
清月　飯島トミ子
竹原　池田俊美
氷壑　伊澤香雨
耕雲　伊勢康江
八街　伊藤照子
立精　猪股白慧
玉川　今永咲子
東総　薄田春緑
及川　太田比奈子
太友　大友四峰
深大　四枝一新
青蓮　蒼原順香
小野　朱星
川内　小林蒲佳
梓江　佐藤祥扇
有秋　高橋千代子
墨縁　武田宗楓
やま　田玉哲子
四枝　丹美枝
千葉　出井霜葉
耕雲　外山文惠
佑朋　中原純子
一葦　中村一琴
上泉　中村シゲ子
澄春　浪川秋花
柳賢　二上香柳
洞書　濱田竹雪
たか　浜野永篁
紅月　林田幹子
長月　原澤典子
常盤　藤本尚子
芳蘭　山本和枝
幸扇　吉田梅香
楓会　裕
芳蘭　渡邊信溪
さつ　渡邊順子
玉川　渡邊博子
大雲　渡辺妙華
（選外379名氏名略）

現代詩文書部（特選）

選評　山崎掃雪

花香　淡墨が美しく線が魅力的
芳博　大字の迫力雄大リズム有
杏邑　鋒先を効かせ変化に富む
紅霞　中央の余白生かされ秀逸
祥舟　細線を効かせ軽快な作

渓翠　筆力のある線で錬度高い
喜代美　リズムに乗り詩情豊か
千華　自在な筆遣いで安定の作
雅悠　筆先の絶妙なバランス佳
紀子　大字と小字生かされ秀作

四峰　躍動する線が紙面を舞う
光琴　ゆったりと安定した線佳
四夏　切れ味のいいタッチ良い
哲子　運筆の呼吸が充実した作
蒼風　変化に富んだ線が楽しい

雄一　濃墨で懐ろ深い文字の響き
雅邦　軽妙な線。作品構成流石
一琴　風にそよぐような運筆良
美梢　沈着な筆捌き存在感あり
緑風　線の抑揚、構成に好感

前衛書部（特選）

選評　三森慧香

栄杏　軽快な筆致で急上昇する趣
雅悠　曲直線宿墨がパワー蓄積
芳瑤　上下呼応が空間美を創る
麗芳　線の躍動が個性化を生む
邑里　明快な斜線が余白を切る

成美　濃渇線の交錯の整理に成功
珠莉　細線で結ぶモダンな造形
光泉　枯葉舞う情緒感豊かな作
洋子　筆致の速さが単調を消す
桃仙　彗星を思わせる圧巻の作

今月の

特別研究部優秀作品（特選）

選評　小竹石雲　後藤大峰　千葉蒼玄　平川峰子

小品の部

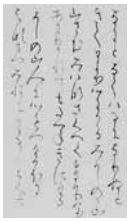
臨書（宗苑社）

茂木絢水「山家心中集」

茂木絢水臨

135×35㎝

部分拡大



◆細線を利かせた息の長い渇筆が実に美しい。西行系のかなはよく理解していないと誤字になる部分があるが、その点も掌中にし、自分の呼吸で見事に書き切る。（洋子評）

かな（潮音）

齋藤杏邑「金葉集より」

齋藤杏邑書

135×35㎝

◆生命を感じる作品。特にたての線条が強くて美しい。潤渇、連綿、かなの魅力を全て備えた品格があります。（峰子評）

臨書（八街）

三浦英樹「争坐位文稿」

三浦英樹臨

135×35㎝

◆原帖の肉太の書線を的確に捉えている。さらに全体の流れが無理なく紙面上で活躍している。今後は、他の古典にも挑戦し、書技を鍛錬されたい。（大峰評）

前衛書（玉州）

角張芳蘭「心象」

角張芳蘭書

132×35㎝

◆上から下に一貫した流れで正攻法の3部構成でまとめている。潤渇の変化もあり立体感があるが、墨が薄いせいか黒のボリュームが今一歩か。（蒼玄評）

〈小品の部〉

創作の部（39点）
漢字―7点
かな―4点
現代―18点
篆刻―0点
前衛―10点
臨書の部（42点）
漢字―41点
かな―1点

総出品点数81点

〈特選候補者〉

（創作の部）
「漢字」
粋仙　藤井龍仙
水茎　高岡秀汀
「かな」
創珠　阿部珠翠
「現代詩」
四枝　奥川麗流
炎佳　伊藤紫炎
蓉花　坂本蓉花
蒼風　笹木蒼風
もく　青木藤漣
植松　梅田紅雨
「前衛」
大拙　佐藤陽子
秀水　坂井初江

（臨書の部）
「漢字」
八街　十河春景
澄春　土屋恵仙
春城　東原春城
八街　三浦小樹
菁湖　北嶋菁湖
麗澤　富田瑶翠
八街　大日向幽香
千葉　山口鈴風
八街　天翔
笙　相楽睦月

大作の部

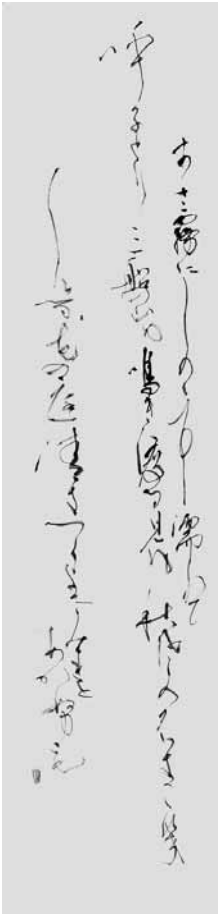
現代詩文書（大雲）藤井花香「中也の詩」

120×90㎝

藤井花香書

◆筆先が立ち、弾力をうまく生かし、大きな運腕で書かれたこの作は、気宇の雄大さと淡墨の淡い明るさが相俟って情趣豊かな作に仕上がる。（石雲評）

かな（水茎）清水蘭舟「万葉のうた」

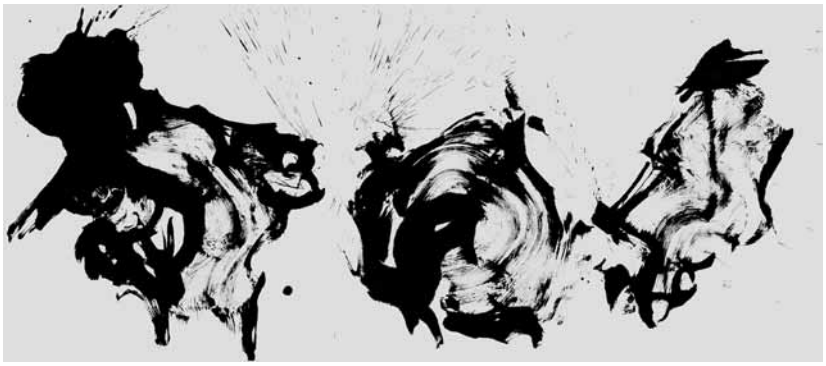


225×52.5㎝

清水蘭舟書

◆墨の濃淡の美しさと行の流れを魅せる巧みさに脱帽。文字の大小の組み合わせ字間の余白の分量に細やかな計算が伺える。（峰子評）

前衛書（容洲社）阿部邑里「はばたきて」

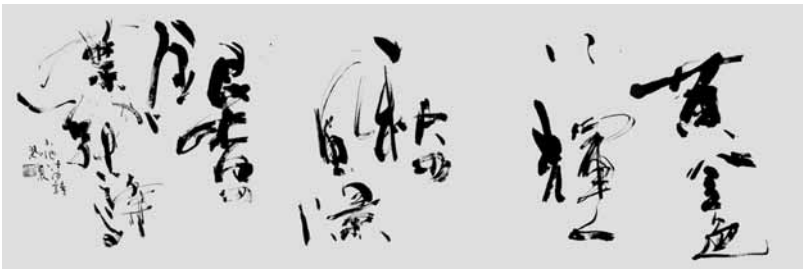


79×182㎝

阿部邑里書

◆すさまじい回転運動のエネルギーで紙面を圧倒する。中心の飛びも輝きを持って紙の白を華やかに色取っている。（蒼玄評）

現代詩文書（八戸）市川紫泉「小池けいの詩」



60×180㎝

市川紫泉書

◆ゆるやかに、悠久の想いを馳せた作。物思いに耽る秋を詠った詩に情感をこめた柔軟な線がお洒落に仕上がる。（石雲評）

〈大作の部〉

創作の部（37点）
漢字―3点
かな―4点
現代―12点
前衛―18点
臨書の部（13点）
漢字―12点
かな―1点

総出品点数 50点

〈特選候補者〉

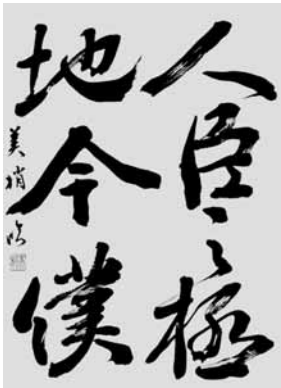
（創作の部）
「漢字」大拙 畠中 成山
「かな」伊呂 鈴木 英晴
「現代詩」四枝 大友 四峰 仙台 熱海 桃翠
「前衛」玉州 遠藤 和香 一弦 道塚 紫音 白珠 大塚 桃子 月華 浅野 黄扇 光風 千葉 光泉 光風 千葉 光龍

（臨書の部）
「漢字」大雲 神谷 雲卿 大雲 舟寶 恵美 遊山 紺野 遊山 紅瑤 相澤 敦子 澄春 新行内芳蘭
「かな」清月 境野 和子

漢字研究部
（争座位文稿）

選評　名越蒼竹

今月のホープ作品



鷺山美梢

漢字研究部　特選　鷺山美梢

課題古典の用筆と運筆の特徴をきちんととらえ、字形もしっかりと観察して半紙全体の章法をスキのないようにまとめ上げた、素晴らしい臨書作品である。実力の高さが窺え、出品作の中では抜群の完成度であった。

◎漢字研究部総評

課題古典の解説は簡潔ながら大切な情報がしっかりと書かれており、内容をよく理解咀嚼して臨書に取り組んでほしいと思います。残念ながら「争坐位稿」の用筆・運筆や字形の特徴を無視した作品がかなり見受けられました。（難しい課題であることはもちろんですが…）始筆、終筆部では鋒先を立てるようにするとともに、太い縦画も直筆で紙に圧力をかけることが大切です。一部、筆順違いで順位を下げた作品がありました。

雅菜圓邦　幸睦月子　京　篁亜幽俊雅翠　右希彩雄芳　千谷白雅桃美　華恵柳泉翠楓　俊吾玉寛奎千汀
泉子山秋

かな研究部
（山家心中集）

選評　福田令子

今月のホープ作品

井上清泉

かな研究部　特選　井上清泉

藤原行成の手とされる冒頭2行の筆力が見事である。また「なにとなく」からのリズム感と、弾力の変化が自然で、西行の品位を感じさせられる作品。

◎かな研究部総評

全体的に丁寧に臨書されていましたが、いつでも書き始める前に「よみ」を良く見て理解してから、学んでいただきたいと思います。

香舟　伯泉　鼓祥　香舟

清耀　寿子　玉枝　清耀

惠子　由美　惠子　惠子

淳子　宏子　淳子　華扇

かな研究部成績表

特選

◎井上清泉

秀作（60言層）

紅瑤泉　上田清泉　こだ瑤泉　書雲　大鼓香　松村泉　紅木風　松貝　青木玉　磯畑　永井美　北田恵　須田美　上爪　菊月恵　紅月美　樹原子　清韻子　蒼月子　竹月恵　高真子　書泉子　紅瑤泉　上草　上泉　紅韻泉　琉瑤泉　斐月　清月子　伊呂子　清晴子　上月子　琉叶子　上野子　山縣子　早部子　高木百合子　七丑三和子　松尾希美子　寺前華　熊井屬　徳江子　葛淳子　佐藤由　新井恵　田美子　青寿玉　磯畑美　永井枝　北爪清　須田耀　上泉　◎井上清泉　福山井　高中月　附月　清月　伊呂　清月　上泉　琉瑤　上泉　紅韻　書泉　高真　竹屬　蒼陽　清月　樹原　琉韻　菊月　紅風　松村　大雲　書泉　こだ瑤　紅泉　上泉

佳作（60言層）

大雲　一梓　高崎　素雪　玉川　明漢　書月　白露　竜泉　晴月　〃　〃　玉松　上泉　〃　〃　上泉　もく崎　高月　青泉　上泉　紅風　高真　琉韻　一弦　上泉　青蓮　高崎　もく草　桜泉　上雲　隆泉　〃　〃　清美　竹仙　高美　八口　森木　本多　船津　廣美　林代　早枝　萩原　沼田　二通　西川　苗代　長沼　長井え　中村シ　中里ゲ　塚本ち　田中耶　竹澤衣　滝澤子　高山子　高橋れ　春雅子　鈴慶琳　島外子　佐藤美　坂本綾　酒井奈　権芳博　小代知　坂雪子　黒華　柳素　竹華　大葉　山口　矢木　橋登　奈紀江　都舟　和恵　代枝　美　美　津子　廣子　林子　早朋　萩聖子　沼洋子　二圭子　西麗　苗藤象　長佳　長沼恵　中村子　中里子　塚本香　田中子　竹澤子　滝澤子　高山子　高橋れ　春雅子　鈴慶琳　島外子　佐藤美　坂本綾　酒井奈　権芳博　小代知　坂雪子　黒華　柳素　竹葉　もく青木藤蓮

入選（60言層）

光会彩　楓松　玉松　恵泉　青蓮　たか月　文露　白習　石仙　華雅　橋　〃　澄春　〃　長月　佑朋　白露　誉田　天埠　A I　立精　青湖　澄春　竹原　堺生　八か　声香　聖堂　大雲　蔦書　遊山　大阪　秀畝　竜泉　一弦　う華　東仙　上向　青泉　琉韻　誠和　高真　千葉　菁湖　八街　正華　八生　藍　菁湖　春汀　もく新井　浅井　浅みな　青木藤雪　渡邊　山崎　本柳　三浦　松村　松丸　前川　藤原　深堀　深澤　平山さ　原田　原澤　野久　中野恵　中里美　寺本美　千田星　多田恵　新内子　代瑞　嶋葉　篠記　猿枝　笹右　恵子　佐野子　久間洋　坂本子　山井　紺野　小林子　小林　池　呉　工藤　木村　菊地　菅野　粕谷　小野　小棹　鵜澤　岩上　猪又　井ノ　石股　石白　石春　池ノ　上渡　利治　佳知　川津　川代　祐香　朱音　啓子　和江　葵郷　信代　小恵　真翠　陽子　愛石　瑛仙　清葉　清洗　佳月　だ子　典子　祐子　美子　美子　星子　恵子　白香　青音　恒子　采子　礼子　琴舟　郁子　理子　鈴扇　翠菜　翠径　津子　代子　香　朱音　啓子

祥紫　映紅　青湖　水茎　A I　正華　秀畝　声香　大抽　一弦　〃　春汀　光彩　芳美　潮蘭　蒼音　高陽　玉真　青蓮　竹原　青原　富湖　青貴　菁湖　旭舟　小露　正華　書泉　澄老　正春　大華　書阪　明游　大漢　玄阪　〃　〃　正華　〃　椿翠　上か　土気　清月　澄春　八精　静翠　和平　わか　一心　福山　土気

鈴木　杉田　菅野　下村明　清水　清水　由紀　柴田　椎名　三條　佐藤　佐藤　佐々木　佐々木　櫻田　櫻龍　斉藤　齋藤　込山　木春　慶長　熊谷　久根崎　北登　菊嶋　河地　川原　川木　神帆　金崎　尾京　谷子　片岡　加晴　加瀬夏　加瀬峰　加明日　鍛翠　小治　小野寺　小林　荻和　澤子　田良　尾風　大紅　大湊はる　大湊あか　島昌　大島人　遠藤珙　梅津楽　臼井佳　牛久綾　植保乃　猪雅子　井股　井ノ口　井上春　井上智　伊英　石幸　池二子　崎子　森林　石幸　五十風　睦心　睦子　映紅　日香　青蘭　清舟　清子　由紀　蘭舟　洋子　光子　裕子　陽子　純子　淳子　木和子　龍貞　杏舟　江彩　杏邑　美艸　美紀　熊谷　智子　竹鈴　長谷　暮春　高真　川街　川蓮　青原　竹湖　菁貴　菁湖　正華　小紫　書泉　旭老　澄春　正華　大阪　書游　明漢　大阪　玄穹　〃　〃　正華　〃　椿翠　上か　土気　清月　澄春　八精　静翠　和平　わか　一心　福山　土気

選外144名氏名略　声香　梓香　昌苑　竹美　東伯　幸扇　こだ　祥紫　や　菁ま　椿湖　あ翠　一か　八弦　青街　月湖　中華　中街　墨宣　幕張　千葉　蓮紅　蓮湖　菁　もく　大雲　祥紫　生大　もく　正華　は華　たせ　麗澤　一心　青湖　錦織　西あ　西島　縷満　永悦　中井　中子　中西　中江　富澤　戸部　樋守　堺か　高真　掃雪　千葉　高真　澄春　華祥　玉川　竹沢　武井　高橋　高木　関根　瀬尾　須美　藤萩　米倉　吉松　吉田　吉田　横山本　山本　山根　山田　山口　矢野　安嶋　本吉　村上　村美　宮内　三塚　三浦　三真庭タ　松島　松重　本田　本郷　堀切　船木　藤本　福富　林浜野　長谷　長川　谷織　長谷あ　谷川さ　谷久翠　高子　恵子　喜美　恵子　喜子　登子　藤原　戸澤　富白雲　中江み　中西よ　中江子　永井　永島　永久子　永子　遼子　満美　悦子　知子　恵子　恵子　雪亜　雪篁　雪希　佳理　利風　樋泉　鶴淵　津田　玉沢　井幸　香華　一江　幸苑　高橋　昭華　高木　関代　根子　尾京　瀬子　須子　藤子　萩雨　幸香　翠子　蘭舟　真紀　梅香　美子　律子　梅香　美子　櫻京　雪子　風子　真紀　智恵　佳月　梨帆　倫果　蒼舟　小樹　真紀　智子　美子　美子　彩子　谷桂　幸恵　悦雲　恵子　喜子　恵子　美子　美子　子子　子子　子

審査会員の部　結果発表（出品数 漢字26点・かな14点）

選評　種谷萬城・下谷洋子

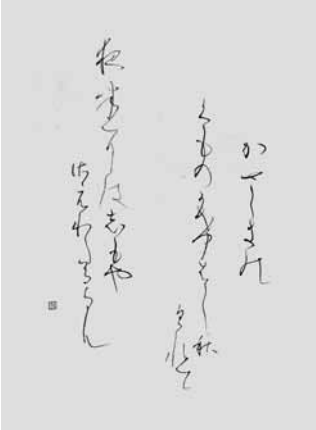
〈次点・50音順〉

江本　興舟

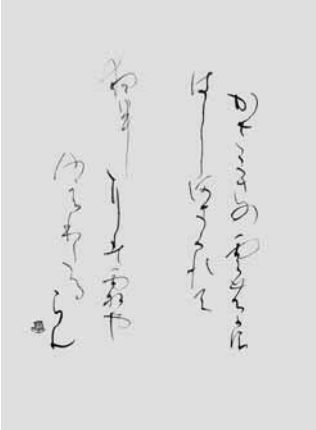
青木　藤漣

佐藤　一義

井ノ口春峰



茂木　絢水



藤井　龍仙

漢字秀逸作

土屋恵仙

漢碑と漢簡を学び、独特の風趣を持つ隷書スタイルを創作している。線に深味、渋味があり、課題語句に合致した風格を持つ隷書。力量の高さが窺える。（萬城評）

かな秀逸作

鈴木英晴

塊と長い行を組み合わせた行バランスが絶妙。行間の広狭も自然で美しい。その上に、しなやかに流れるリズムと線質の変化が加わり爽快な精彩感です。（洋子評）

硯上の里おがつ学生展

●会期　令和６年12月15日(日)
～17日(金)
９：00～16：30
（最終日15：00まで）

●会場　道の駅 硯上の里おがつ
雄勝硯伝統産業会館内
〒986－1333
宮城県石巻市雄勝町下雄勝２－17
TEL 0225－25－6844

●主催　硯上の里おがつ　（共催）千葉蒼玄

●後援　石巻市・毎日新聞社・河北新報社・石巻かほく・（公財）書道芸術院・ほか

第三十回

白扇書道会選抜展

会期　令和七年一月六日(月)～一月十日(金)
午前十時～午後六時（初日は午後一時から。最終日は午後四時まで。）

会場　アートサロン毎日
千代田区一ッ橋一－一－一　パレスサイドビル一階
☎〇三－三二二一－〇三二一（内線八六五八）

白扇書道会の代表メンバーによる選抜展を開催致します。
ご高覧・ご指導下さるようご案内申し上げます。

理事長　種谷萬城

出品者

舟扇谷種（故）
子和高
峰英村
雲石竹
城大元
華萬谷
春蘭川
舟澄瀬
風鬱池
石翠首
雪弄中
扇掃崎
雲藤田
街鄭村
軒鄭浦
峰熒内
扇邑平
舟幸久
華叙浪
雨京尾
象僊島
雲藤川
峰舟瀬
雲佳宅
華柱辺
華心関
華春田
泉龍川
華瑞森
驩舟
水龍本
輝悠谷
仙恵屋
泉華見
美恵寶
麗清本
飯木小辻種市加小最畑山半田三大大佐竹寺長西広三渡今宇大小小坂種土人舟橋

書道芸術誌及び書道芸術学生版購読について

本誌の購読中止を希望される場合には必ず、書道芸術院事務所までご連絡ください。

連絡がないと本誌は3ヶ月間は、そのまま送られていくことになります。誌代が未納入の場合でも扱いは同じです。必ず中止の連絡をお願い致します。

また、中止によって誌代に残金が生じた場合は返金を致します。この場合、返金額が3000円に満たない時は同額分の切手をお送りしております。あわせてご了承ください。

よろしくお願いいたします。

第35回

日本童謡の書展

会期：令和6年12月17日（火）～12月22日（日）
9時～16時30分
会場：千葉県立美術館　第5室（入場無料）
千葉市中央区中央港1-10-1 TEL 043-242-8311

童謡は心のふるさと、人生のスタートであると共に、書のスタートであります。素直で、明るく、のびのびと、このままの心で伸びて行きたい。老年になっても子供の心が大切であり、壮年も青年もこの幼年の心を忘れたくない。このような書を書きたい。

主催：日本童謡の書協会
後援：全日本書道連盟・書道芸術院・白扇書道会
毎日新聞社・朝日新聞社・読売新聞社・産経新聞社
千葉日報社・他

日本童謡の書協会
事務局
〒260-0012 千葉市中央区椿森1-18-4-901　種谷萬城方
Tel・Fax 043－284－4281

第73回 和光展

心に文学
手に筆を

ご高覧下さいますよう
ご案内申し上げます

●日　時　令和七年
一月十一日(土)～十三日(月・祝)
十時～十七時
(最終日は十六時まで)

●会　場　コスメイト行橋　一階
一般の部　多目的ギャラリー
児童生徒の部(半紙)　ロビー

●揮毫会
一月十二日(日)十三時～　ロビー
顔真卿臨書から現代文書へ

主　催　和　光　塾
共　催　行橋市教育委員会
　　行橋市文化協会
後　援　苅田町教育委員会
　　みやこ町教育委員会
　　(公財)行橋市文化振興公社
　　(公財)書道芸術院
　　毎日新聞社　西日本新聞社

事務局
〒824-0003 行橋市大橋一―七―十二
高田　幽玄
電話〇九三〇(22)〇四六八

『認定証』発行

「書道芸術」の各部門別に、師範の資格を取得されている方に対して『認定証』を発行しております。

次の要領で、申請してください。

申請料　1部門　1万円

申請書式　はがき大の用紙に次のように記載し、申請料とともに現金書留でお送りください。

認定証申請書
申請者名(姓号)
1郵便番号
2住所・電話番号
3支部、支部名
4申請部門(漢・かな・漢字条幅・かな条幅・ペン字)
5師範資格取得年月日

認定証発行の年月日は師範資格取得年月日となります。

受付日より1ヵ月程度で認定証をお送りいたします。

お願い事項

※「書道芸術」競書出品するためには、バーコード出品券が必要です。

○**新規登録**(無料)

○**再発行申請**(有料：500円分切手)紛失・破損・支部・氏号変更

○**登録内容変更**(無料)住所・電話番号変更・指導者名変更

各種申請用紙は、事務所までご請求ください。

指定形式以外の申し込みは、お受けできません。また、バーコード出品券に訂正されても変更できませんので、**必ず手続き**をして下さい。

第78回 書 道 芸 術 院 展

併催＝第76回全国学生書道展

会　期：令和７年２月５日(水)～11日(火・祝)
9：30～17：30（入場は30分前まで）※11日(火･祝)は14：00閉室

会　場：東京都美術館（上野公園内）
〒110－0007 東京都台東区上野公園８－36　TEL 03－3823－6921(代表)

主　催：公益財団法人 書道芸術院

後　援：文化庁・公益社団法人 全日本書道連盟・毎日新聞社
一般財団法人 毎日書道会

《表　彰　式》令和７年２月８日(土) 15：30～（受付15：00～）
上野精養軒

《祝　賀　会》令和７年２月８日(土) 17：30～　上野精養軒

《作品解説会》東京都美術館展示会場

- **令和７年２月９日(日) 11：00～**　秋季展前衛書展出品作家研究会
  14：00～　各部作品研究会
- **令和７年２月11日(火・祝) 10：00～**　作品研究会

第76回 全 国 学 生 書 道 展

● 全国学生書道展指導者作品展示

会　期：令和７年２月５日(水)～11日(火・祝)
９：30～17：30（入場は30分前まで）　※11日(火･祝)は14：00閉室

会　場：東京都美術館（上野公園内）学生展展示２階 第２展示室
〒110－0007 東京都台東区上野公園８－36　TEL 03－3823－6921(代表)

主　催：公益財団法人 書道芸術院

後　援：文化庁・公益社団法人 全日本書道連盟・毎日新聞社
一般財団法人 毎日書道会・毎日小学生新聞

《席上揮毫会》令和７年２月８日(土)　10：00～
学生展展示会場

《表 彰 式》令和７年２月８日(土)　13：00～（受付12：00～）
上野精養軒

《ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ》令和７年２月９日(日)　13：00～
学生展展示会場

書展

「春洋会展参観の記」

畑中弄石

会期＝令和6年10月12日(土)～14日(月・祝)
会場＝大阪産業創造館3階 マーケットプラザ

一〇〇回記念展と銘した2024春洋会書展が10月12日(土)～14日（月・祝）大阪産業創造館で〝四季を書く〟のテーマで開かれた。特別展示として第95回毎日書道展の受賞者作品も展示されており、春洋会の規模の大きさが伺い知れる。

会場に足を踏み入れると、テーマの「四季」の雰囲気が漂って来る。

「はる」と題する会長の小林琴水さんの作品の深味は別格として、石田春窓さん、飯田春香さん、崎井恵風さん等の作品はいつもながらの素敵な雰囲気で四季を表現しており、特に飯田さんの「春」は圧倒されるほどの素晴らしさを発揮している。中尾琴麗さんの勢いを感じさせる線の魅力、冨原扇水さんの「銀河鉄道の夜」の作品の仕上げ方のセンス等楽しめる人たちも。

早村春鶴さん、水田春峰さん、前田龍雲さん等男性陣の作品も長年の渋味が十分に線に溢(あふ)れている。前田龍雲さんの淡墨作品の余白を利かした味わいの魅力が楽しい。若い男性たちの存在も、これからの発展を大いに期待させる。また、力強い女性群は男性群とさらに一緒に協力し合って活動をともに進めて欲しい。

春洋会の今後は、今回の一〇〇回展でいちばんの産物が生み出されたのかもしれない。

それは関西の仲間をまとめる春洋会の力になり、関西総局という名前を活かすことでもある。このことは、春洋会の力でしかできない。

春洋会展会場風景

春洋会展会場風景（作品解説会）

春洋会展会場風景

書展のご紹介について

。**予　告**

後援申請書を書展会期**2ヵ月前**までに提出して下さい

。**報　告**（訪問記）

400～450字程度（1行17字詰）

会場風景、作品写真等2枚まで

・写真の裏にキャプションを必ず明記して下さい。

・書道芸術院後援の展覧会に限らせていただきます。お知らせのあった書展のみ掲載いたします。

・訪問記掲載の場合、編集部まで事前にご連絡下さい。

編集部

後援申請について

後援申請をされる場合、**書道芸術院所定の申請用紙**でお願いします。

事務所にご連絡いただければお送りいたします。

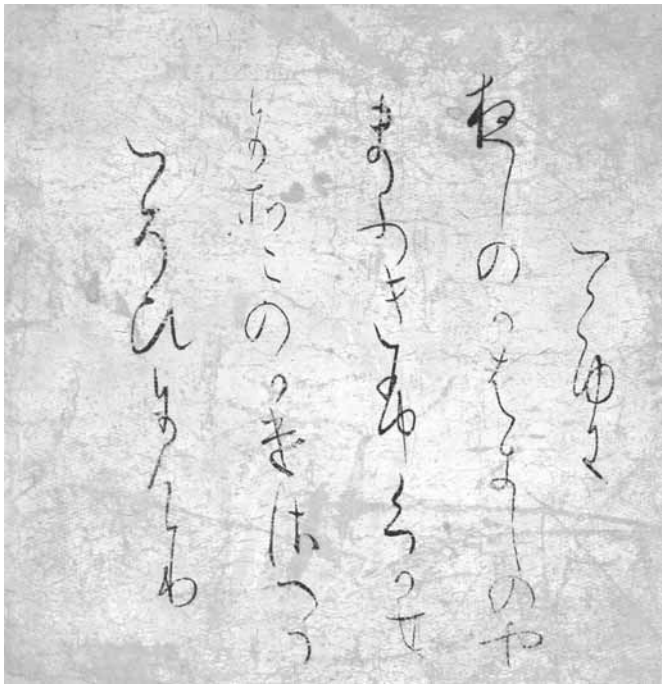
・代表の方の団体、社中における役職名を明記して下さい。

予告　2025・1月号(765)の「古典鑑賞」・「古筆鑑賞」の課題

（2月14日締切）

古筆鑑賞 ㉕⓪

寸松庵色紙（伝 紀貫之筆）①



（掲載図版・70%に縮小）

〈よみ〉
つらゆき
よしのがはきしのや
まぶきふくかぜ
にそこのかげさへう
つろひにけり

古典鑑賞 ④⑦⑥

金文 ①（㝬𣪘）

（掲載図版・70%に縮小）

用𠈌保我家𢦏立㝬身
陁降余多福害蕈宇慕
遠猷㝬其萬禾𩰫實𢦏
多禘用𦍒壽

《院関係出品者》

◇セイコーハウス銀座ホール展

下谷　洋子

小竹　石雲

◇セントラル会場100人展

石井　明子

石田　春窓

太田　蓮紅

大辻多希子

大平　邑峰

勝山　初美

坂本　素雪

武山　櫻子

千葉　蒼玄

（50音順）

《セイコーハウス銀座ホール展》

会期＝2025年１月４日(土)～９日(木)
午前11時～午後７時
（最終日は午後５時閉場）

《セントラル会場100人展》

会期＝2025年１月４日(土)～９日(木)
午前10時～午後６時
（最終日は午後５時閉場）

昭和五十年一月二十七日第三種郵便物認可
令和六年十一月二十五日　印刷
令和六年十二月　一　日　発行
（毎月一回一日発行）　書道芸術　第七六四号

●篆刻
【1月15日締めきり】

〈出品規定〉

①摹刻　㋐課題による語句
　　㋑原印自由
　　（出品の際、原印のコピー添付）
②創作　語句自由

○印面の大きさは2.3㎝（八分角）以内とし朱文、白文自由。
○印箋は市販のもの、半紙横1/2の大きさに切ったものも可。
○応募は①か②のどちらかとする。

12月号　摹刻課題

〈原印コピー〉

齊白石

「阿芝」

◉出品方法

用紙の右側に押印し、左側に印影の釈文を明記、並びに落款（氏号）を入れる。

762号篆刻優秀作品

選評　後藤大峰

摹刻特選　鷺山美梢

「齊白石」

細部にわたり確実な取組み方に拍手を送りたい。運刀も正確です。

創作特選　新村翠芳

「寛仁厚徳」

構成、運力ともに真面目な作品で佳い。さらに研鑽を積まれたい。

（摹刻）

特選　大雲　鷺山　美梢

秀作（50音順）　大雲　小沢　華仙　大網　片岡　豪峰　白琉　平塚　由香

佳作（50音順）　蒼原　庄司　櫻空　遊雲　中川　研治

入選（50音順）　八街　佐藤　朱葉　石心　成田　能喜

（選外1名氏名略）

（創作）

特選　八街　新村　翠芳

秀作（50音順）　生大　中畠　義則　粋仙　藤井　龍仙

佳作（50音順）　遊雲　赤星　文庵　石心　篠田　華所

入選（50音順）　唯一　逢沢　唯一　秀恵　阿部　雅悠　游水　荒川　裕泉

（選外なし）

◎篆刻部総評

最近、余り出品点数が少ない中、真摯な作品が散見されました。それは創作、摹刻いずれもで、さらに多く方々の意欲作を望みます。（大峰評）

今月の注目作　藤井龍仙

「和喜」

◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

〒101-0031
東京都千代田区
東神田1―16―7
東神田プラザビル3階
公益財団法人 書道芸術院
電話（03）3862―1954
FAX（03）3862―1957

ご連絡等は月曜日～金曜日 10時～16時 の間にお願いいたします。（土・日・祝日は休み）

送料

1か月の購読部数が1部～9部までの1回の郵送料

1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円

10部以上は送料免除

令和六年十一月二十五日印刷
令和六年十二月　一　日発行
定価　1部　七五〇円
編集兼発行人　下谷洋子
データ処理　株式会社リンクス
印刷　小沢写真印刷株式会社
発行所　公益財団法人　書道芸術院
〒101-0031
東京都千代田区東神田1-16-7
東神田プラザビル3階
電話（03）3862-1954
FAX（03）3862-1957
振替　00150-4-135058
ホームページアドレス　http://www.links.co.jp/shogei/